



ヨルダンのハッサン王子（フセイン前国王の弟）。何度も来日している知日派だ

「その一団は遠く中国よりもまだ離れた神秘の島国からやってきた。長らく鎖国を続けながら一度開国を決めると西洋文明をまたたく間に吸収して自分のものにする一方、近代的な軍事化に成功して周辺の国を植民地化するも、列強との戦争に敗れ、しかし焦土の中から再び火の鳥のごとく飛翔し、経済大国に生まれ変わった国。彼らは遙々この地にやってきて、伝統と近代化をテーマに、われらと大いに忌憚なき意見を交わし、一瞬のうちに帰っていった。対話の残響が乾いた大地にかすかに響く」

ギリシャ、ペルシャ、ローマ、ビザンティン、オスマンと名だたる帝国が勃興し、衝突し衰退してゆく、その歴史の舞台となってきた地で、「遠い島国」日本からやってきた私たちを、そこに

住む人々はこう書き残すのだろうか。日本からの1週間のミッションは、ヨルダンから始まった。

### ヨルダン ハッサン王子との対話

メンバーは、イスラム地域研究のエキスパート、東京大学の山内昌之教授を団長に、国際協力銀行の田波耕治副総裁、神戸大学の五百旗頭真教授、オリンピック柔道金メダリストの山下泰裕・東海大学教授、そして筆者の5人。ヨルダンの首都アンマンでまず、故フセイン国王の弟であるハッサン王子が待つラガダン宮殿に向かった。

「意見が違う、ということを確認することのできる文明的な枠組みが必要なのです」。英国式の緑豊かな庭園に設けられたテーブルで、ハッサン王子は切々と「対話の文化」の必要性を語った。ヨルダンは、流血の惨事が続くイスラエル・パレスチナと、アメリカが軍事力をもってフセイン政権から「解放」したイラクという、まさに両隣に燃え盛る火を見ながら立っている国だ。その王国の柱となる王家の重要な一員として生きて

# 文明の十字路で 行なわれた “遠い島国”との対話

第2回  
中東文化交流・対話ミッションに  
参加して

えばらみき  
榎原美樹  
NHKバンコク支局特派員

きたハッサン王子の表情には、国が抱える苦悩がそのまま滲み出ているように感じた。

「イスラエルとの関係がどうあるべきか、早急に見直す必要がある。イラクでは、アメリカが軍事介入した後の次のステップとして、どう平和を構築するか、概念が欠けてしまっている」「日本は地理的に離れているが、それだけに客観的な立場から地域的なパートナーシップを促進する役割を果たしてもらえるのではないか」。王子は日本への期待についても強調し、予定の時間をはるかに越えて対話が続いた。

#### 日本の立場は

「ともに考え、ともに歩む」

ヨルダンとイランのシンポジウムで、日本側は何を伝えることができたのか。団長の山内教授が両国で強調したのは「ともに考え、ともに歩む」だ。

日本との間で国交が樹立されてから今年で50年となったヨルダンでは、山内教授は、①先のG8サミットで提示された「拡大中東構想」（中東地域の発展と安定は国際社会全体にかかわる課題であり、先進各国は民主的・社会的・経済的な改革への支援を表明するというも

の）の実現のために、具体的なプログラムを先進国とアラブ諸国が一緒に工夫するべきであり、②そのために日本とヨルダンは、この構想を地域と住民の自主性と内発性を強調する方向で実現するために何が必要なのか、相談するべきだ、③民主主義の確立に向けたプログラムは、その国あるいは民族の政治的尊厳の回復があつてこそ成り立つものである——との考えを示した。そして、中東における知識社会の建設のためにIT（情報技術）や教育分野などでさらなる日本の協力の可能性を挙げた。

テヘランでは、山内教授は去年の第1回ミッシェンの際に出た、19世紀末の日本とイランが直面した「近代化」をめぐる議論を踏まえて、今回さらに議論を深め、当時の立憲国家づくりを進める過程において、国力をいかに発揮させるかに尽力した経緯を語った。

歴史のなかでの互いの共通項を見だし、そのなかに差異を見つけ、経験を分かち合う。しかも前回ミッシェンの成果のうえに、議論をこのように積んでいくことができれば、それがたとえゆつくりとしたものであつても、しっかりと基礎のうえにやがては後世



ヨルダン・イラン両国で柔道指南をした山下泰裕八段は、どこでも大歓迎された。オリンピック金メダリストから直接、技の指導を受けた若者や子どもたちは、目を輝かせながら「一生忘れない」と喜んでいった。この柔道指南も中東ミッションのハイライトのひとつだ

イランのテヘランで開かれたシンポジウム「伝統と近代化」。昨年、小泉首相の中東訪問の際、イスラム世界との相互理解を進めることで合意し、第1回ミッションを派遣した。今回はその2回目



に残る建造物のように築きあげられてゆくのではないか。その「一緒に積み上げる」過程が、じつはミッションがめざす最も大切な目的なのかもしれない。

### いまそこにある 「過激な思想」の影

日本側の呼びかけに対して、相手側からは何が読み取れたのか。ヨルダン

では、平和な日本に生きる私たちには想像が困難なほどの、山積する問題とそれが落とす影の暗さを感じた。シンポジウム自体は友好的な雰囲気のうちに行なわれ、冒頭講演したマルワン・ムアシャル外相は「日本はどうか、あそこまでの経済成長を達成することができたのか。どうすれば日本のような進歩が可能なのか、学べべきことは多い」と日本の近代の軌跡を讃えた。しかしまた、「今の時代は世界的にアラブ人、イスラム教徒のだれもがテロを起こしていると疑われる不公正が蔓延しており、われわれも

その犠牲となっている。その一方で、過激派が活動できる余地を与えてはいけない。過激派は人々の苦しみに巢食って生きるからだ」と訴えた。この、アラブ人（あるいは国家）またはイスラム教徒への嫌疑に対する不満を抱える一方で、人々を「過激な思想」に走らせる環境が実際に隣国だけでなく国内にもあり、その思想に共感・共鳴するエレメントを抱えているという、その苦悩はいかほどのものか。

パネリストの一人、ヨルダン女性問題国家委員会事務局長のアマル・サツバグ女史も、シンポジウム前日の夕食の席で筆者に対し、ヨルダンの女性たちがいま最も危惧していることは、「過激な思想」が国内に入り込んでくることだ、と語った。女性たちがこれまで苦勞して築きあげてきた社会的地位や獲得してきた権利、これらが一夜にして崩れる危険性をヨルダンを取り巻く環境は大いに孕んでいる、というのだ。さきほどの外相の言葉を借りれば「近代化とは、伝統の損失に等しい」と主張する輩がいる。中東諸国ではまさに、現代においてこの命題こそが、そこにある最も深刻でかつ根深い問題なのだ。



えばら みき ●NHKバンコク支局特派員／大阪大学文学部西洋史学科卒。1987年NHK大阪放送局に入局。91～94年ヨーロッパ総局（ロンドン）特派員。94～99年報道局国際部（この間の96～98年、衛星第1放送「プライムタイムニュース」キャスター）。99～2000年バンコク支局特派員。2000～02年「ニュース10」の国際問題担当キャスターとして韓国・北朝鮮の南北首脳会談、イギリス総選挙やイラン大統領選挙、9・11テロ事件、アフガニスタン戦争などを取材。02年から現職

## 「日本と西洋」 普遍性と変化の模索

近代化で成功をおさめた日本、といつても万事が順調にいったわけではなく、揺籃期には「テロリスト」が活発に活動して互いに衝突も起こし、社会が不安定化した時期もあった——五百旗頭教授のこのわかりやすい説明に共感を持って聞きいった人たちは多かっただろう。200年以上続いた鎖国を続けるのか、もしくは開国するのかがめぐって、日本が真つ二つになり、武力で衝突した時代。悩んだ末の選択を日本人自らが行なったその歴史が、ときにユーモアあふれる五百旗頭節で語られた。近代化は成功し、国家の自立を保つたところまではよかったが、過信と驕りは往々にして「成功したやり方を変えにくい」状況をつくりあげ、やがては戦争へと自らを導くことになり、敗戦を迎える。教授の重要なメッセージは、その後の日本に起きたことである。戦後、朝鮮戦争が勃発した際、日本に対して再軍備をせよと迫るアメリカに対して、当時の吉田首相はこれを断り、日本の安全保障はアメリカに任せる、その代わりに日本は自国経済

の建て直しに邁進するという選択をした。これが焦土の中に立ち尽くした国を、後に経済大国といわれる国に復興させてゆくスタートとなったのだ、と。

国際協力銀行副総裁の田波氏は経済専門家の立場から、日本の経済発展の基礎にどのような日本独自の思想があったのかについて講義した。日本の経済が戦後50年あまりのうちに世界最高水準にまで達した、その背景には「乏しきを憂えず、等しからざるを憂える」という平等意識（すなわち所得水準の平準化）、「和をもって貴しとなす」という調和性（すなわち和を基本とする雇用関係や企業間取引の長期継続性）、そして武士道（すなわち道徳観）といった伝統的精神構造が脈々と流れているのである。また、戦後の復興に向けてアメリカなどから巨額の借款を受けながらも、そうした精神に則って、できるだけ早い自立を目指した。自国の発展には「自分たちが何をやっていくのか」を考えることが大切なのだ、との考え方を示した。

## 「グローバル化」に どう対応するか

「伝統と近代化」というテーマを掲げ

た際、日本人にはどうしても、黒船到来から大政奉還、開国して近代国家づくりに邁進した時代、あるいは第二次世界大戦後の復興から経済成長へという変化の時代を、どちらかというところ「振り返って」過去の軌跡をたどるという見方になりがちだ。それに対して中東諸国では、今まさに伝統と近代の価値観が社会のなかで衝突し、実際にそれが政治不安やテロリズムをも引き起こしている。これはコンテンポラリーな問題であって、それに伴う危機感や焦燥感を、日本人にはなかなか自分のもんとして共有することが容易ではないと感じた。

ただ、いまや国境を越えてわれわれは、世界共通の課題に直面していることも間違いない。それは、いやおうなしに地球の隅々で起きる「グローバル化」にどう対応していくのか、という問題だ。とりわけ1979年のイスラム革命以降、国全体がまさに古き伝統のなかにすっぽりと隠れ入ってしまったかに見えたイランで、今回のシンポジウムにおいて主要なパネリストがみな何らかの形でグローバルリズムとその影響について言及したことは興味深い。なかでも、英字新聞「イラン・ニュー

ズ」の発行責任者で大学教授のモハンマド・ソルターニファル氏の「情報化時代における仮想文化」と題する発表に、筆者は多に刺激された。

その内容は——21世紀のネットワイク社会では、もはや「正統的アイデンティティ」と呼ばれていたものは失われつつある。グローバル化は文化の面でも進んでいて、衛星通信システムは新たな観念が国境を越えてやってくることを可能にし、「検閲を困難にして国民的一体性を守る責務のあるナショナルな報道システムを脅かしている」。しかし、グローバル化は単なる西洋化かという点、そうではない。メディアの世界規模の発展を「西洋文化帝国主義」として理解したのは「一世代前のマスメディア研究者だ」とソルターニファル氏は一蹴し、「文化のグローバル化は文化の均一化として理解することはできない。なぜなら『グローバル』とは、絶対的に『ローカル』と対立するものではないからだ」と結論づける。厳しい規制を受け、弾圧の対象ともなる言論界に生きる同氏が、このグローバル化の波を好機だととらえるポジティブな姿勢に感銘を受けた。

また、イスラム自由大学政治学部で

「ジェンダーと権力」を研究する若き女性研究者ファアテメ・サーデギー教授は、ヘジャブ（女性が身体の線や髪の毛を隠すためにまとうヴェール）の持つ概念の歴史の変遷を例に取り上げ、女性研究者自らの視点で発表した。かつてヘジャブは、社会から「隠れ住むこと」をできる余裕がある上流階級の女性のみが、権力の象徴として身に付けていたが、近代社会では誰しもが身に付ける一般的なものとなり、社会のなかで「公」と「私」を区別する、分離を意味するものとなった。では、いま近代化が進むなかで問題となるのは「自身の伝統的文化を守る一方で、自由と平等を、女性を含めるすべての階層に与える能力をイスラム社会が持っているのかどうか」である、と聴衆を前に大きな問題を提起した。

イランの有識者による既存の社会構造に対する果敢な挑戦の声。それはもちろん、発言してもほとんどの場合は問題にもならず、無関心さのなかに溺れてしまうことも多い日本と比較すると、ここでは行間に表わされていたり比喩のなかに隠されていたりして直接的でない場合も多いのだが、だからこそ発言の一言一言が、公的な場である

シンポジウムで行なわれた、そのこと自体が筆者にとっては予想以上の収穫だったと言える。

### うごめく内からの 変化への期待感

グローバル化の波は外から来るものであるうが、それに呼応する社会の内からの変容、そして内なる変化への期待感のうごめきを、筆者は米ブッシュ大統領から「悪の枢軸」と呼ばれた国、イランで感じた。それは、自らを「改革支持者だ」と呼び、ハタミ大統領を側近として支えるアブタヒ法律・国会担当副大統領（保守派に反発して今年10月12日に辞任）が、われわれミッシェンの表敬訪問の際に話した次の言葉にも表われている。

「改革とは川の流れであり、川の本質は国民である。いまやイランでは、権力が保守か改革か、どちらの側にあるのかは問題ではなくなっている。なぜなら、改革の方向へ向かう列車に国民はすでに乗り、その列車は動き始めているからだ」

前回の選挙で保守派が圧倒的な勝利を収め、改革の動きが止まるどころかまたもや後ろ向きに動くのではないか

との危惧が国内外にあることは確かだが、副大統領は、権力の所在はもはや関係ないという。彼は、国境のない情報社会の現実を知る若い世代であるが、現体制で権力を握る人でもある。この社会に住む一般の市民は、実際にどう感じているのだろうか。私は街を歩き、前回2001年の大統領選挙の際に見たイラン社会と、何がどう変化しているのかを観察することにした。

目に入ったのは女性のファッションの変化だ。かつて、女性たちは赤い口紅をつけただけで、革命防衛隊の女性風紀委員によって、見せしめのために唇をナイフで切られたこともあった国だ。たった3年の間に女性の服装は大きく変化した。オーバークートの丈は短くなり、なかには身体の線がくつきりとわかるデザインで、しかもブラウスのように薄い生地1枚だけを身につ

けている若者もいる。カラフルなスカートで、前髪をわざと見せるようにして頭の後ろだけを覆っている女性もいた。裸のくるぶしを見せることなど考えられなかった日は過去のものとなり、裸足でサンダルを履いている女性もいた。聞くと「若いうちにおしゃれを思いつき楽しみなさい、私たちはできなかったから」と母親が言うのだそうだ。

ミッシェンの間隙を縫って、アメリカの大学から戻ったばかりのイランの若い友人と会った。連れていってくれた小さなレストランは、おしゃれを楽しむ女性やカップル、楽しそうな子どもたちの笑い声に包まれていて、これがまさに「列車」の中なのか、と見渡した。彼女は言った。「そう。人々はもう保守派・改革派の権力者たちのどちらを信じるというわけではない。ど

ちらに票を入れたところで、権力者たちができることは限られている。だから多くが投票に行かず、結果的に保守派が勝った。どっちに転んでも、あと15年後にこんな体制が保たれているわけがないと多くの人が思っている」。

勝者と弱者がくつきりと分かれると言われるグローバル化時代。厳しい国際環境に置かれたこの国の市民が、近い将来、内外で起きるであろう荒波をすで見すえて、しかしそのさらに沖に明るいものを見るだけの強さを備えていると感じた。振り返って日本は、はたして現在起きている変化の大きさに対応する柔軟性と、その先に「こうありたい」とする目標があるのか、日本ではこれからのような歴史が編まれていくのか——ミッシェンを終え、そのような思いをめぐらせつつ帰途に着いた。☪